所長　原島文雄

Fumio
HARASHIMA

巻頭言

年頭所感

新年おめでとうございます。21世紀へのカウントダウンにも慣れて，心はすでに来世紀にある方々も多いことと思います。

世界状勢，国内政治，学内状況も大きく変化しつつあり，ここで各個人が，自分のアイデンティティーを見つめなおし，個人としての将来を模索するとともに，合わせて，生研のことについても多少の時間を割いて，お考えいただければ幸いです．生研の今後は，皆様方生研の全構成員および生研を考えて下さる所外の方々にかかっています．御意見，御批判あるいは積極的御提案がございましたら，いつでも所長室（内線　2000）まで御連絡下さい．

生研の目的は，つねに議論され，多くの書き物にも掲載されていますので，いまさらくり返しませんが，私個人にとっては，生研は，「自由でかつ創造的な研究の場」以外の何物でもありません．工学は，20世紀後半に人類が創造し花開いた偉大な文化と信じておりますが，その発展期に生研という環境の中で，その文化の創出を当事者として経験できるということは，なによりも幸いと思っております．

正月気分をはなれて，いかにして「自由でかつ創造的な研究の場」を実現・発展させるかということを考えてみましょう．

第1に，社会はこのように一見贅沢なものを税金でサポートすることを受け入れているだろうかという疑問です．答はYESと確信しています．ただし，このためには，常に，生研の存在と価値を社会に意義あるものと認めていただくための努力が必要でしょう．（この問題については，世界の歴史，人類の文化などから議論したくなるので，詳しくは，また，別の機会に）

第2に，自由でかつ創造的な研究を行える人材を十分に確保できるかという疑問です．これについても答えはYESです．生研の教授総会の人事は，十分これに応えています．

第3に，これがもっとも現実的な問題ですが，この目的を実現するためのシステム，インフラストラクチャーの整備です．この問題は，次の3つに分けられます．すなわち，研究体制，教育への寄与，建物・設備の整備です．

「研究体制」については，生研では，各研究室の各個研究を創造的研究のベースとして，複数の研究室の共同による流動的グループ研究，さらに大形なものとしては，センターなどの組織をつくって行う3つのレベルの研究体制が定着しており，その内容についても，将来計画委員会でほぼ5年毎に大枠を設定し，さらにその具体的実現については，特別研究審議委員会，研究推進室などでたえず議論しています．

「教育への寄与」についても，議論が進んでいます．社会の高学歴化が進み，東大においても，学部の大学院重点化が始まりました．研究と大学院教育を中心としてきた生研としては，教育問題について，アウフヘーベンのよい機会です．従来の工学系研究科の枠内だけではなく，工学に携わる者の一層の高等教育をめざしたシステムの提案も行われています．本年も真剣に議論を

続けたいと思っています．

「建物・施設」の整備も急務です．新聞・雑誌等でもよく報道されているように，国立大学の研究・教育設備の荒廃は進んでいます．幸いにも有馬総長を始めとする方々のキャンペーンにより，社会的に理解は進んできましたが，実際に予算化され，目に見える形でインフラストラクチャーが整備されるまでには，さらに時間がかかるでしょう．個人の生活レベルはこの数十年格段によくなったのに，研究・教育における環境を低いレベルのままに放置した責任も自分のものと観念し，建物・設備の一新に向けて，全学と歩調を合わせて，生研でも全所的にとりくんでいます．

やはり最後に生研の目標をくりかえします．

『都市形総合工学研究所』として，

工学価値貢献	高等技術者教育貢献
社会貢献	国際貢献

という工学の4つの方向を目指しています．皆様のご理解とご支援をお願い申し上げます．